

3 オニテナガエビの種苗生産研究

神里裕夫

目的

オニテナガエビは熱帯産の大型淡水エビ(最大300~500g)である。雑食性でコイ、アユ、ニジマス等淡水魚用の配合餌料や養鶏飼料及び魚の"アラ"などによる飼育が可能で、成長は早く美味である、養殖種として好条件を備えている。しかし低水温に弱く(13~15℃で危険)本土では冬期の養殖に問題を残している。その点沖縄では有利と思われるので、本県の気候条件に適した養殖対象種と考えられる。

本年度は、初年度として幼生飼育に習熟することと、手持ちの親えび不足を補うために種エビを確保することを目的にして、個々の細い分析的な仕事は省いた。

経過と結果

昭和48年3月19日~12月26日にかけて6回の幼生飼育試験を行なった。飼育槽として500ℓパンライト水槽を使用し、適宜換水と底掃除を行なった。結果は次の通りであった。

(1) 飼育水の塩分濃度

幼生はかなりの広塩性を示し、30~50%海水ではほとんど差は見られなかった。しかし淡水中では1週間以内に死滅し、100%海水中では2週間以内に死滅した。

(2) 幼生の餌料について

アルテミアを餌として用いると飼育槽の汚れがひどく、幼生は途中で死滅した。初期餌料としてワムシを中心に少量のアルテミアを投与し、15日目以後はその他に貝肉(リュウキユウマスオガイ)やミジンコを餌として与え、合計180尾の稚エビを得た。

(3) 幼生の歩留り

6回の飼育試験のうち2回は途中で死滅したが、4回は稚エビまで飼育することができた。しかし得られた稚エビは合計180尾に止まり、歩留りは極めて悪い結果となった。

(4) 産卵ふ化について

1親当りのふ化幼生数は、3月19日の低水温期にふ化した幼生(約3600尾)を例外として除くと、約10,000~45,000尾、平均28,000尾で、大型個体ほど産出幼生数の多い傾向が見られた。

年間の産卵回数については、1尾の親で数回産卵するようであった。

今後の問題点

- (1) 今回の試験ではアルテミア幼生による飼育は失敗したが、愛媛及び静岡県の水試ではアルテミア幼生による種苗生産を行なっているので、その検討がさらに必要である。
- (2) 幼生の生残率を高めるために、主として適性餌料とその投与量を明らかにすることが急務である。
- (3) 現在の飼育法では換水と底掃除に非常な手間がかかるので、その検討をする必要がある。